「戦中昭和19年、6大都市の国民学校で1食7勺（しゃく）（混合米握り飯2個）の給食をしていました。戦後の再開は同22年1月から。この写真は東京都千代田区の永田町小学校（現麴町小学校）の学校給食の様子ですね（同23年）。子どもたちの空腹を満たしてくれました」写真提供／毎日新聞社

私の昭和

学校給食が戦後の食糧難を救いました

香川芳子　女子栄養大学学長

学校給食は戦後の深刻な食糧難を救いました。昭和21年に東京・神奈川・千葉で試験給食、翌年には全国都市の児童約300万人に対して開始されます。弁当箱でごはんを各自で持ってきて、汁のみの給食でした。同24・25年とユニセフから脱脂粉乳、米国から小麦粉が寄贈され、8大都市の児童に対して完全給食が始まります。脱脂粉乳はにおいがきつかったり、とかし方が悪かったり、乳糖を分解しにくい体質のために下痢をしたり、と評判はよくなかったのですが、良質たんぱく質やカルシウム、ビタミンB_2に富み、子どもたちの栄養状態は大いに向上しました。

昭和31年のことです。母・香川綾は昼間働いている人にも栄養学を学ぶ場を設けたいと二部（夜間部）を創設しました。当時、私は東大医学部の大学院生でしたが、気になって夜は教務課に顔を出していたところ、教務課長を拝命しました。二部の卒業生には家庭科教員が多いのですが、北海道で教員をしている卒業生から相談の手紙が届きました。「凶作で複数の子どもが昼食を持ってこない。どうにかしたい」と。カンパしてお金や食べ物を送ったのですが、戦後10年以上たっても学校給食が普及していない地域もあったのです。学校給食があれば子どもたちの食事を確保することができた、そんな時代もあったのです。